書　評

Agostino Paravicini Bagliani, *Boniface VIII. Un pape hérétique ?* Payot: Paris 2003, 508 p.
アゴスティーノ・パラヴィチーニ・バリアーニ『ボニファティウス8世 ── 異端の教皇？』

藤　崎　　衛

中世の最も個性的な教皇の一人としてボニファティウス8世（在位1294〜1303年）が挙げられる。日本においては，特にフランス国王フィリップ4世と激しく対立し，教勅「ウナム・サンクタム」の主張に代表される教権主義者として，またアナーニで屈辱を受ける事件に見舞われ，教権の衰退を招いた教皇として語られることが多いのではないだろうか。教会法に関しては『第六書』（*Liber sextus*）を編纂したことでも知られていよう。ところで，この教皇については近年数多くの論考が発表されている。その理由の一つには，大聖年にあたる西暦2000年を迎えるにあたって，歴史上初めて聖年とされた1300年に関心が集まったということがある。たとえばこの教皇による聖年の設定を論じたA・フルゴーニの研究がほぼ半世紀を経てイタリアで単行本化された[1]。そして最初の聖年が注目される以上，これを設定した当時の教皇で，2003年に没後700年を迎えた教皇ボニファティウス8世にあらためて興味が向けられるようになったのは至極当然である[2]。また，2003年に前後していくつかの研究

---

[1] Arsenio Frugoni, *Il giubileo di Bonifacio VIII*, Roma - Bari 1999, 2000³. もともとは1950年にイタリアの学術雑誌に発表された論文である。

[2] 2000年にローマで「ボニファティウス8世とその時代 ── 1300年，最初の聖年」という展覧会が開かれた。そのカタログは多分野にわたる18篇の重要な論考を含んでいる *Bonifacio VIII e il suo tempo. Anno 1300. Il primo giubileo*, ed. Marina Righetti Tosti-Croce, Milano 2000.

集会が開催され，モノグラフや学術論文として成果が発表されている[3]。しかも歴史学，文学，美術史学，教会法学など多岐にわたる分野の研究者が交流を重ねることで，新しい知見が数多く生まれつつあり，研究状況は学際的な様相を呈している。

ここで取り上げるパラヴィチーニ・バリアーニ（以下パラヴィチーニとする）の著書は，ボニファティウス 8 世の没後 700 年にあたる年に，フランス語の原著に続いてイタリア語訳も出版されており[4]，まさに上述の研究潮流の中に位置づけることができるだろう。本書の学術的重要性をよく示しているのは，その出版以後に発表されたボニファティウス 8 世に関する数多くの研究がしばしば本書を参照しているという事実である。著者はバチカン図書館のスクリプトル(scriptor)としておよそ 12 年間地道な写本研究に携わった後，20 年以上にわたってローザンヌ大学教授を務めてきた 13 世紀の教皇庁を主な研究対象とする中世教会史家であり，フランスのアナール学派との親交も深い。これまでボニファティウス 8 世の学術的な伝記と呼べるものは 1933 年に出版されたボウズによる英語のものしかなく[5]，こちらが比較的政治史に比重が置かれたのに対して，70 年後に現れた今回の伝記的研究は，以上のような著者のバックグラウンドを考慮すると，社会史的な考察をしばしば試みているとい

---

[3] 重要なものをあげておく。*Bonifacio VIII. Atti del XXXIX Convegno storico internazionale (Todi, 13-16 ottobre 2002)*, Spoleto 2003 また，イタリア文化財文化活動省の施策の一環である「ボニファティウス 8 世没後 700 年記念国立委員会」主催のシンポジウムの成果として，*Bonifacio VIII. Ideologia e azione politica. Atti del Convegno organizzato nell'ambito delle Celebrazioni per il VII Centenario della morte. Città del Vaticano-Roma, 26-28 aprile 2004*, Roma 2006 (Bonifaciana, 2); *Le culture di Bonifacio VIII. Atti del Convegno oraganizzato nell'ambito delle Celebrazioni per il VII Centenario della morte. Bologna, 13-15 dicembre 2004*, Roma 2006 (Bonifaciana, 3) がある。ボニファティウス 8 世研究の叢書である Bonifaciana シリーズには，この教皇在位期の教皇庁スタッフや関係者についての膨大なデータを提供し，後続の研究に不可欠となるであろう Thérèse Boespflug, *La Curie au temps de Boniface VIII. Étude prosopographique*, Roma 2005 (Bonifaciana, 1) が収められている。

[4] Agostino Paravicini Bagliani, *Bonifacio VIII*, Torino 2003.

[5] Thomas Sherrer Ross Boase, *Boniface VIII*, London 1933.

うのも納得がいく。

当然のことながら，この 70 年の間にボニファティウス 8 世についての，また彼の周囲の人物や関係するテーマについての研究は著しい蓄積を見た。なかでもＴ・シュミットによる「ボニファティウス裁判」の研究[6] と，この裁判に関係するボニファティウス 8 世を告発する文書の決定的とも言える校訂を行ったＪ・コストの業績[7] は見落としてはならない。特に後者は校訂テクストと解説を提供するのみならず，告発の類型の索引を作ってわれわれの研究の効率を格段に高めたといえるからである。パラヴィチーニは今回の著作をこの亡きコストの記憶にささげたが，それほど多くをコストに負っているのである（p. 10）。

ここでパラヴィチーニが典拠にした史料について触れておかなければなるまい。典拠史料のほとんどは 14 世紀前半までのものである。すなわち，教皇自らが発した書簡や勅書，諸々の年代記，詩人の残した詩作品などである。これらに加えて本書できわめて重要でかつ独特の史料となるのが，前任の教皇であるケレスティヌス 5 世の伝記[8] と，ボニファティウス 8 世と敵対した二人のコロンナ家出身の枢機卿であるジャコモとピエトロ，およびフランス人レジストのギヨーム・ド・ノガレやギヨーム・ド・プレザンスらが残した告発文書や調書 ── 1297 年から 1312 年にかけてのものでコストが校訂を行った ── である。

---

[6] Tilmann Schmidt, *Der Bonifaz-Prozess. Verfahren der Papstanklage in der Zeit Bonifaz' VIII. und Clemens' V.*, Köln - Wien 1989 (Forschungen zur kirchlichen Rechtsgeschichte und zum Kirchenrecht, 19).

[7] Jean Coste, *Boniface VIII en procès. Articles d'accusations et dépositions des témoins (1303-1311). Édition critique, introductions et notes*, Rome 1995 (Studi e documenti d'archivio, 5).

[8] "S. Pierre Célestin V et ses premiers biographes," *Analecta Bollandiana* 16 (1897), pp. 365-487. ケレスティヌス 5 世については，さしあたり次を参照。Peter Herde, "Célestin V," in *Dictionnaire historique de la papauté*, ed. Philippe Levillain, Paris 1994, pp. 319-322. なお，最も古い『ケレスティヌス伝』の校訂版が最近出版されたことを付け加えておく。*Die ältesten Viten Papst Cölestins V. (Peters vom Morrone)*, ed. Peter Herde, Hannover 2008 (Monumenta Germaniae historica, Scriptores rerum Germanicum, Nova series, 23).

13 世紀末から 14 世紀初頭にかけての人物でこれほど豊富に史料が残っているケースはほかにない。しかし，ケレスティヌス 5 世の退位およびボニファティウス 8 世の即位の正当性に異議を唱える『ケレスティヌス 5 世伝』やボニファティウス 8 世を貶めようとする告発文書から当の教皇についての史実や人物像を掬い出す試みが大変な困難を伴うであろうことは，容易に想像できる。告発者たちが発し，そして残された情報には，歪曲や誇張があると考えるのが自然だからである。副題の「異端の教皇？」は，まさに敵対者たちがボニファティウス 8 世を異端と告発したことに由来する。それでも著者は，敵対者たちの言葉からも史実に接近し人物像を鮮明にしようという困難に果敢に立ち向かう。こうして，われわれはC・ギンズブルグの『チーズとうじ虫』や『ベナンダンティ』，E・ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユー』，また最近ようやく日本語に訳されたM・ド・セルトーの『ルーダンの憑依』などを繙読するときと同じように，告発のメカニズムの一端を垣間見ることになる。

＊　＊　＊

本書は一人の教皇の伝記というスタイルをとっているため，時間軸に沿って話が進められていく。八部構成（23 章）の内容を簡潔に紹介しておこう。第一部では，のちに教皇ボニファティウス 8 世となるベネデット・カエターニについて，アナーニなどの聖堂参事会員から始まり司祭枢機卿に至るまでの経歴やカエターニ家の興隆をたどりつつ，法学の素養や巧みな外交的手腕，激しい性格などによって人物像が描き出される。ケレスティヌス 5 世の退任に至るまでの騒動も扱われる。第二部では，ナポリでのコンクラーベによる教皇選出の経緯をたどり，フランシスコ会心霊派の動向にも言及しつつ，退位したケレスティヌス 5 世がフモーネ城に閉じ込められそこで没したこと，ボニファティウス 8 世の即位直後からその正当性に対する疑義がすでに提起されたことが確認される。第三部は，英仏の国王たちに対して聖職者への課税を禁じた勅書「クレリキス・ライコス」に始まる西欧諸国の君主たち，特にフランス王フィリップとの政治的駆け引きの展開を追う。第四部では，コロンナ側がカエターニ家の金庫を盗んだことに発する両家の対立が主に扱われ，対コロンナ十字軍の組織，およびコロンナ側のジャコモとピエトロの二人の枢機卿の屈服の儀式に至るまでの経緯が再構成される。第五部は，彫像

や図像に表象される教皇のイメージ，聖年の設定と贖宥の布告を扱う。第六部では，教皇が患っていた腎臓結石や教皇を取り巻く医者たち，教皇の錬金術に対する関心などが扱われる。第七部は，激化する仏王フィリップと教皇の対立，教皇の至高権を説いた勅書「ウナム・サンクタム」の検討，そしてフランス側が教皇を異端，悪魔崇拝者，偶像礼拝者として非難するロジックの展開が俎上に載せられ，本書の白眉ともいえる。最後の第八部は，教皇の故郷アナーニにおける交渉，捕縛，解放，そしてローマに帰還してからのその死と埋葬に焦点が当てられる。以上のほとんどの章を通じて，教皇の死後いっそう増大するコロンナ家やノガレらの告発が言及され，その内容の妥当性が検証されている。

しかし，本書では時間の流れからそれた主題の検討も所々で披露されていて，そこでは著者自身がこれまでに積み重ねてきた，独創性に富む研究の成果が滲み出ている。たとえば，教皇の移動を扱った本書第 13 章はわずか 5 ページがあてられているだけだが，著者がすでに別の機会に行った 13 世紀全般の教皇の移動を追跡するという極めてユニークな研究を下敷きにしており，教皇領統治や教皇領内の都市についての深められるべき主題に直結している[9]。また，遺体や復活についての教皇の態度を扱う第 14 章と侍医や身体のケアを扱う第 18 章は，著者の代表作である『教皇の身体』や科学史に関する諸論考を併せ読むならば，いっそう

---

[9] Agostino Paravicini Bagliani, “La mobilità della Curia Romana nel secolo XIII. Riflessi locali,” in *Società e istituzioni dell’Italia comunale: l’esempio di Perugia (secoli XII–XIV)*, Perugia 1988, t. 1, pp. 155–278; *id.*, “Der Papst auf Reisen im Mittelalter,” in *Feste und Feiern im Mittelalter. Paderborner Symposion des Mediävistenverbandes*, ed. Detlef Altenburg, Jörg Jarnut und Hans-Hugo Steinhoff, Sigmaringen 1991, pp. 501–514; *id.*, “La mobilità della corte papale nel secolo XIII,” in *Itineranza pontificia. La mobilità della Curia papale nel Lazio (secoli XII–XIII)*, ed. Sandro Carocci, Roma 2003 (Nuovi studi storici, 61), pp. 3–78; *id.*, “La mobilità della corte papale nel Duecento. *Cura corporis* e vita di corte,” in *Domus et splendida palatia. Residenze papali e cardinalizie a Roma fra XII e XV secolo*, ed. Alessio Monciatti, Pisa 2004 (Atti della giornata di studio, Pisa, Scuola Normale Superiore, 14 novembre 2002), pp. 29–42.

広い時代の幅と深みのなかに位置づけることができるだろう[10]。さらに，第 8 章が扱う教皇が作らせた自身の墓や，第 15 章で論じられる彫像，教皇冠や鍵といったシンボル，図像などによって表象される教皇のイメージについての分析も，美術史の成果を貪欲といってよいほど取り込んだ著者のこれまでの研究に裏打ちされている[11]。

＊　＊　＊

歴史記述というものが，過去の再構成と，歴史家による過去との解釈的な対話とを ── D・ラカプラ[12] のように対立させるのではなく ── 互いに関連づけるべきものであるならば，パラヴィチーニは本書でその両方を丁寧に峻別したうえでバランスよく関連づけ，その作業過程も分かるように読者に提示している。文中，疑問を提起するにとどめたり，条件法を多用することで事実かどうかの判断を留保するなど，読む側としてはいくらかもどかしさを覚えるかもしれない。しかし，それは語りの歯切れの悪さというよりは，史料に真摯に向き合い，不必要な解釈は慎むという著者の学問的誠実さにもとづくものである。

むしろ気になる点を挙げるとするなら，次々と告発内容の価値を無効にするあまり，著者の意図の有無は問わないにしても，告発者たちがただの悪役あるいは敗北者であると読者に印象づけてしまうのではないか，そしてボニファティウス 8 世が単に中傷をこうむった被害者であるという印象を短絡的に与えるのではないかということである。これはおそらく本書の主人公である教皇への思い入れに加えて，先駆者コストの解釈に影響されているからではないだろうか。いずれにせよ，特にコロンナ家の憎悪の生々しさが伝わりにくい。

むろん，著者が対立する両者を機械的に色分けしているようには思わ

---

[10] Agostino Paravicini Bagliani, *Il corpo del papa*, Torino 1994 (英語，仏語，独語にも訳されている); *id.*, *Medicina e scienze della natura alla corte dei papi nel Duecento*, Spoleto 1991 (Biblioteca di《Medioevo latino》, 4).

[11] Agostino Paravicini Bagliani, *Le Chiavi e la Tiara. Immagini e simboli del papato medievale*, Roma 1998, 2005² (La corte dei papi, 3).

[12] ドミニク・ラカプラ『思想史再考 ── テクスト，コンテクスト，言語』山本和平・内田正子・金井嘉彦訳，平凡社，1993 年，第一章，特に 60〜65 頁。

れない。それに，告発の根拠をたとえば紋切り型だということで，あるいは状況からして時間的に遡って粉飾ないし考案されたものだということで斥ける手続きは，これだけでは反証にはならないはずであるとはいえ，個々の告発内容に照らしてみておおむね首肯できる。また，告発の根拠を斥けるにあたって，しばしばなぜそのような告発が提起されたのかを被告の具体的な言動にも求めようと踏み込んで考察しているのも説得的である。たとえば，第 21 章で論じられるように，教皇が偶像崇拝者だという告発の背景には教皇自身が存命中に自らの胸像や立像を造らせた事実があり，それは古代ローマの皇帝（そしてフリードリヒ 2 世）に倣ったからであろうと指摘する。

＊　＊　＊

本書に付された教皇の彫像や図像などの写真，教皇領の地図，13 世紀から 14 世紀初頭までの教皇一覧，年譜，教皇の移動を示す表，主要な家系図は，本書を読み進めるために便利である。もっとも，カエターニ一族の系図が本文で語られる家族関係と一致していないのは残念である[13]。また，人名索引は付されているものの，地名や事項の索引はない。これらも備わっていたならば，本書はもっと有用な参照文献となりえたであろう。とはいえ，伝記的研究によって著者パラヴィチーニが評価されるべき二つの点は損なわれない。

一つは史料に取り組む姿勢と研究の提示の仕方である。著者はまずは素直に史料に向き合ってそれが語ることを聞き，そのうえで明らかに事実であるとみなせること，おそらく事実であると推測されること，おそらく事実ではないと推測されること，そして明らかに事実でないとみなせることを丹念に腑分けする。少なからぬ情報を提供する告発文書を扱うにあたっては一層の慎重さを要する。本書の記述は，この作業過程そのものの提示にほかならない。本文中に引用される史料が占める割合は予想以上に多く，史料に語らせるという著者の基本姿勢は徹底している。そのおかげで，われわれ読者は，本書を読み進める過程で歴史家の作業

[13] 本文（pp. 109，126，161，175，212 など）に従うならば，家系図（p. 467）は誤っている。ピエトロ 2 世やフランチェスコはロッフレード 2 世の息子のはずであり，一般的にもそう認められている。

場に立ち会うことになるのである。

もう一つは，上記の作業によって13世紀末の一人の教皇の生涯と人物像をこれまで以上に総合的に描き出した点である。フランス王権との対立などをとおして明らかにされる教皇の至高権の主張はよく知られてきたが，言葉だけの主張にとどまらず，ボニファティウス8世は視覚表現や象徴物によってほとんど際限なく自己表現を図った。その独自性を著者は見事に示すことができたといえるだろう。